

西神戸YMCA学園都市バザー

ワイワイまつり

書記 杉本隆人



10月20日、秋晴れの天候の中、朝8時半集合し、餅つきの準備をスタートさせて、10時半の開館にむけて、開場時には、もち販売することができました。

開場後ではありますが、高等学院から3名の応援や、友人、知人合わせて15名のボランティアが応援してくれたので、餅つきは、大盛況のうちに、40kgのもち米をつき上げることができました。ワイワイまつりの来場者も1,200名を超える方々が来てくれ、抽選券も完売という快挙を成し遂げました。

そして、今年度は西神戸YMCA学園都市開設30周年記念ということも合わせて、ワイズメンズクラブとしてクリアファイルを提供し、入場者の方々にプログラムや関係資料をファイルに挟んで配布することができました。

本当に多くのYMCAのスタッフを始め、若いリーダーたちの応援と多くのボランティアのお陰をもちまして、盛況のワイワイまつりとなりましたことに感謝申し上げます。



チャリティーラン開催 11月3日(土)

書記 杉本隆人

例年通り、神戸市北区のしあわせの村で行われました。今回のチャリティーランは、歴代の大会では、最小の参加人数で開催されましたが、お天気にも恵まれて、秋晴れ日和となり、盛況なチャリティーランとなりました。

事前の事務例会では、餅つきの数量をどうするのか問題となりました。参加人数と餅つきをお手伝いしていただけるボランティアの人数を考慮しつつ、協議を重ね、重ねて、例年より10kg少ない30kgに抑えた餅つきとなりました。その結果、餅つき終了時間にも販売数量にも本当にぴったりの大当たりとなりました。

「わいわいまつり」と同じくらいのボランティア14名の応援もあり、みんなの協力もあり、特に問題もなく順調に餅つきができました。最高に楽しかったのは、臼に残ったもちを、じっと見ている子供に食べさせて上げると、最初は嫌がるのですが、食べると美味しいといって笑ってくれる笑顔が堪らなく嬉しかったです。「ホンマに可愛いよ!!!」

今回のもちつきのハイライトは、YMCA 高等学院生徒のほか、保育園、こども園の保育士さんらもお手伝いをしてくれたことです。保育士さんたちにとっては、とてもいい経験してもらったと思っています。

近いうちに保育園やこども園で餅つきをする機会には、きっと役に立つことと期待しております。また、いつでも要請されれば応援に駆けつけますと約束し、絆を深めることができました。





「フランス・ルルドからピレネー山脈を超えて サンチャゴ・デ・コンポステーラへ2大聖地 を訪ねて10日間」(第4回)

丹家元陽 ワイズ

7月20日(木) (続き)

この辺でバスクのおさらいを。バスクはピレネー山脈を挟んでフランス南西部とスペイン北部に広がり、アルタミラの洞窟でも知られるように旧石器時代から人々が住んでいた。



バスク語が公用語で白、赤、緑のバスクカラーのバスク国旗(イクリーニャ)もある。その中心がビルバオ。民族学的にも謎が多く、バスク人の4割がRh(-)との事。大きな石を持ち上げたり、木を切り倒したりする競技もここが発祥。今もなお、バスク独立を熱望している。

7月21日(金)

16°C。今日も朝シャンの朝食後、小麦畑、黄色く満開のひまわり畑の間を西へ約55Km. Astorga 着。このアストルガはサンティアゴ巡礼路上にある人口約1.2万人程の街で、ここにもガウディ設計の司教館がある。こじんまりとしたお城のような形で、外にも中にもふんだんにガウディらしきがあふれていて、中のステンドグラスも美しい。

近くの広場には、ほたての貝殻をリュックの後にぶら下げた巡礼者達の姿も。このアストルガから更に西へ80Km. 普通の田舎道を走る事1時間半。標高1500mの村、ビジャフランカは2~30軒の家々が並ぶ村で、ここから巡礼の道の体験スタート。周りの写真を撮っているとツアーの最後尾になってしまった。先頭に行くのは、今回参加の最高齢80才の男性。ゆっくりとしたテンポだが、一足の巾が長い。早く追いつかないと歩こうとしても、かなりの急坂なので息切れがして中々差が縮まらない。周りは小さな高山植物の花や、所々ヒースの紫色の花が気持ちを和ませてくれる。約2.5Kmを約50分で歩き、巡礼者の仲間入り。本当は100Km以上歩かないと認められないそうだ。

更に走る事約1時間で、本日の昼食。ここは標高1300mの山頂。人口30人の村で9世紀に建てられた巡礼路で一番古い教会横のレストラン。巡礼メニューとの事。自家製の辛口赤ワインがピッチャーに入っていてお替り自由。まず最初は、細いパスタと肉の入ったスープが体を温めてくれる。次はじゃがいもと玉ネギを卵でとじたトルテイジャ(オムレツ風)が美味。そして、たっぷりの野菜サ



ラダ(トマト、玉ネギ、レタスにオリーブオイル)。メインは牛肉煮込み、赤パプリカ添えがたっぷり、昼からワインがどんどん滑り込んでいく。デザートはプリンでフィニッシュ！

バスは更に西へ 225Km。約 3 時間半。今回の最終目的地、そして最も楽しみにしていた街へ。街を見下ろす丘は「歓喜の丘」と呼ばれ、巡礼者達がやっと到着したと言って立ち止まる所。そこには2人の巡礼者の像がサンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルの方を指差している感動的な場面。

着いたホテルはパラドール・デ・コンポステーラで1499年、巡礼者達の宿泊所として建てられた所を改装した5つ星。入口すぐ左手がカテドラルで大感激。その前の広いオブラロイド広場には今着いたばかりの巡礼者達が、大きなリュックを降ろして坐り込んだり、リュックを枕に寝ころんだりして、じっくりと喜びをかみしめている。その横では皆で輪になって踊り回る人々もいて更に大勢の観光客も加わり、本当ににぎやか。しかし、一番の中央正面が改修工事の為にシートがかけられているのが少し残念。

ここコンポステーラはエルサレム、ローマに次ぐキリスト教3大聖地の1つ。早速の夕食はPM8:00 ホテルの地下レストランで、石のアーチが高い天井を支えていてピアノの生演奏も。前菜はタコのスライスの上にフォアグラが。

次にホタテ貝のガルシア風。メインはムール貝とタコの入ったシーフードリゾットで胃に優しい。

この時、近くスペースで生ハムを切っている人と目が合う。写真を撮ってもいいかでOK。すると、切っていた生ハム1枚を頂き幸せが倍に！デザートはカスタードクリームとリンゴのクレープ。勿論生ビールとガルシアワイン(この辺はガルシア州という)を存分に頂いたのは言うまでもない。この時のテーブルを囲んだ約10名の中で関西出身は我々2人と大阪の堺から来られた母と娘。普通にしゃべっているつもりなのに、その掛け合いがまるで上方の漫才を見ているようだ、関東から来られているグループに大受け。

< 今月の詩 >

いのち尽きる日まで天を仰ぎ
一点の恥じることもなきを、
木の葉をふるわず風にもわたしは心いためた。
星をうたう心で
すべての死にゆくものを愛おしまねば
そしてわたしに与えられた道を
歩みゆかねば。
今夜も星が風に身をさらす。

尹 東柱(ユン・ドンジュ) (1917~45)

韓国の国民的詩人。クリスチャン家庭に生まれ育つ。延禧専門学校(現・延世大学)を卒業後、日本へ留学、立教大学を経て同志社大学在学中に治安維持法違反の疑いで逮捕され、福岡にて獄死、享年27歳、時代や歴史と向き合いながら、清冽な抒情詩を詠んだ。戦後1948年に出版された詩集「空と風と星と詩」は、今も熱烈な愛読者を得ている。代表作「序詩」の詩碑が延世大学、同志社大学構内に立つ。

～「ポケットのなかの祈り」いのちのことば社フォレストブックスより～